

熊本大学 工学部 土木建築学科 建築学教育プログラム
長谷川研究室

復興状況と研究室紹介

実は、1回目の地震直後、仙台に居る妹から「とりあえず浴槽に水をためて。次が本番だよ！」とメールが来ていた。すぐに指示通りにし、さらにガソリンスタンドに駆け込み、金曜日の晩は大学の駐車場で車中泊していた。夜中、何となく目が覚め周囲を見渡す。避難して来ている車は3台ぐらいしかないなぁ・・・とその瞬間、寝床が跳ねた。

幸い、当大学の学生・院生に死傷者はいなかったが、よりによって、土木建築学科と工学部中枢部署が入っていた校舎が大きく被災、一旦学内のあちこちに仮住まいした後、2年間のプレファブ生活を経て、この春ようやく新校舎に入居できた。ご心配くださった皆さまには、この場をお借りしてお礼申し上げます。ただ、県内には未だ仮設住宅暮らしの方々がいらっしゃるし、益城のズタズタな町並みや無残な姿をさらしている熊本城をご覧になればお分かりのとおり、熊本はまだまだ復興途上であることもお伝えしておく。

さて、当研究室では、「室内空気質の改善」を軸足とした「室内温熱環境の改善」に取り組んでいる。建築環境工学・設備学をベースとしてできる範囲に限られるかも知れないが、在室者の健康を守り、できるだけ快適に過ごしてもらえよう、学内外の方々にご協力を得ながら、「今、ここで、何ができるか」を追究するように心がけている。

応急仮設住宅は建築基準法の適用外であるが、被災者が心身ともに健康で、復興へのエネルギーを維持できる住まいであってほしい。東北大学 吉野博名誉教授のご高配により、地元東北での実態調査に加えていただいたおかげで、豪雨被害があった阿蘇でも調査研究を行うことができ、熊本地震後はその成果をポスター等で周知することができた。

また、大学周辺を見渡すと、高齢者が一人で暮らす古い住宅も、多数の児童・生徒が通う学校も、建物性能や換気設備など理想から程遠いケースが散見されるが、少しでも理想に近づけることができるよう、現場に足を運び、その空間で過ごす人々と話し合いながら対策を考え、データによってその効果を検証している。

ところで、当教育プログラムは学生諸君の研究意欲を尊重し、定員に関係なく研究室を選び所属することができる。どうやら羨にうるさい当研究室は不人気な様子で、おとなしくて真面目過ぎる？極少数の学生だけが来てくれる自称「世界一超少数精鋭」研究室である。おまけに今年度は、M1ちゃんも卒論生たちも非常にシャイ、個人情報保護の観点からも研究室内の写真は控えさせていただくので、熊本にお金を落とす観光旅行のついでに、ぜひ会いに来てやってください。

(熊本大学大学院 准教授 長谷川麻子)



写真1 解体中の被災校舎(2017/10)



写真2 やっとできた新校舎(2019/4)